

SHOW-HI SVシネマフルーツ

★★★★

ヴィクラムとヴェーダ ヒンディー語版	
2022年／インド映画 配給：インド映画同好会／157分	
2024（令和6）年1月27日鑑賞	シネ・ヌーヴォ

Data

2024-11

監督・脚本：プシュカル／ガーヤトリ
出演：リティク・ローシャン／サイフ・アリー・カーン／ラーディカ・アープテ

みどころ

この邦題では何の映画かさッパリわからないが、“ヒンディー語版”となると、こりや、インド映画。だから長い！また、“犯罪サスペンス”なのに、劇中にド派手な歌と踊りが登場！

日本なら、さしづめ高倉健 vs 鶴田浩二の2人か？インドを代表する超イケメンの2人のおじさん俳優が、「善と悪の境界線」というチヨー哲学的かつ難解なテーマを巡って激突！

間を取りもつ美女にも注目だが、クライマックスではそれ以上に“悪の権化”的な方に注目したい。折しも日本では、“政治とカネ”を巡って“安倍派5人衆”的な立件が見送られたため、“巨悪”的な解明は達成できなかったが、さて、本作では・・・？

■□■この邦題は、さしづめ高倉健 vs 鶴田浩二！？■□■

この邦題は一体ナニ？本作はどこの国の映画？本作のチラシには、「2017年リリース年を震撼させた犯罪サスペンス タミル映画「ヴィクラムとヴェーダ」のヒンディーリメイク。」と「永遠に問われる“善と悪の境界線”！」の文字が躍っている。また、チラシによると、本作のストーリーは次のとおりだ。

ヴィクラム（サイフ・アリー・カーン）は優秀な警視。容疑者の逮捕より犯罪の撲滅を目指し、偽装襲撃に血道を上げるが、標的のヴェーダ（リティク・ローシャン）の自首により数々の謎が浮かび上がる。そこで明白となった事実にヴィクラムは我を忘れるほど驚愕する。舞台をラクナウに移し、再び問い合わせられる「善と悪」「善と悪の境界線」。古代インドの物語「屍鬼二十五話」を基にしながらアクションを融合させた作風と「生ける蔵刻」リティクが演じるヴェーダの酒場シーンはインド国内で大きな話題を呼んだ。

そして、インドでは超有名なヴィクラム役のサイフ・アリー・カーンとヴェーダ役のリティク・ローシャンの精悍な顔が大きく浮かび上がっている。こりや、まさに任侠映画華やかなりし頃の、東映の高倉健と鶴田浩二の2人にそっくり！？

■□■最大の注目点はテーマだが、楽曲にも注目！■□■

日本は人口1億人の小さな国土の国だが、インドは人口15億人で国土はバカでかい。そのため、2017年にタミル語版として、プシュカル&ガーヤトリ夫妻が監督、脚本して作った本作を、2022年に同じ夫妻が、舞台を変えてヒンディー語版として作ったというからすごい。「永遠に問われる“善と惡の境界線”！」というテーマはまさにドストエフスキイ級の難問だが、2017年のタミル語版の作詞作曲・歌唱に続いて、本作の音楽も同じ歌手が担当しているので、その楽曲にも注目！

■□■インドに伝わる“説話集”とアクションを融合！■□■

「アラビアンナイト」＝「千夜一夜物語」はペルシャ、インド、エジプトなどから数百年の間にあつめられた物語集だが、その中でも「アリ・巴巴」、「アラジン」、「シンドバッド」などの話は日本でもよく知られている。また、リムスキー＝コルサコフの交響組曲『シェヘラザード』は、千夜一夜物語（アラビアンナイト）の語り手であるシェヘラザードの物語をテーマとした、私の大好きな曲だ。

他方、日本には「日本昔話」があるが、インドには古くから伝承されたインドの説話集、「屍鬼二十五話」なるものがあるらしい。これは、死体に取りついたヴェーターラがトリヴィクラマセーナ王に聞かせる25話で、各話の最後にヴェーターラが問答を仕掛け、トリヴィクラマセーナ王がそれに答えるという形式をなぞっているらしい。本作冒頭のアニメはそれを反映しているらしいが、上記説話集を基にしながら、アクションを融合させた作風と「生ける彫刻」と称されるリティク・ローシャンが演じるヴェーダの酒場シーンはインド国内で大きな話題を呼んだらしい。

■□■“善と惡の境界線”は難しい！しかしそこが面白い？■□■

本作のテーマは、前述のように「永遠に問われる“善と惡の境界線”！」。そんなクソ難しいテーマを、ハリウッドのようなド派手なアクションと、インド映画特有のド派手な歌と踊りで表現するのがインドを代表する2人の俳優だから、奥が深いのは当然だ。ヴィクラム警視は容疑者の逮捕より犯罪の撲滅を目指している男だから、彼が善を表しているのは当然。そうすると、悪を代表するのは犯罪者のヴェーダになるのが普通だが、それではあまりにも単純すぎることに・・・。しかも、ヴェーダは自首してきたのだから、それをちゃんと取り調べて起訴すれば、それでノープロブレム・・・？

いやいや、そうはいかないのが本作だ。その第1の理由は、ヴィクラムの妻で弁護士をしているブリヤー（ラーディカ・アープテー）が、コトをあろうにヴェーダの弁護人に就任したこと。お互いに「仕事は家庭に持ち込まない」と約束し、「仕事と家庭は別モノ」と考えていても、やはり現実はそんな理屈通りに進むものではないようだ。本作中盤では、

善と悪の境界線を巡る最大の論点の前に、ヴィクラム、プリヤー夫婦間の仕事と家庭のあり方という問題が発生することになるので、それに注目！

■口■巨悪の真の所在はどこに？それは警察組織そのもの！？■口■

“安倍派5人衆”の“取り調べ”を含む、「政治とカネ」を巡る30年来の大事件になったのが、「派閥のウラ金事件（政治資金規正法上の不記載事件）」だが、それは結局、秘書への責任転嫁と、ごくわずかの政治家の起訴で終わってしまった。つまり、“安倍派5人衆”を含む大物政治家たちについては、共謀についての証拠が集まらないため、すべて立件されないという結論になってしまった。かつて、田中角栄首相を逮捕、起訴した東京地検特捜部の栄光は、今や完全に過去の遺産になってしまっている。

本作の評論になぜそんなことを書いているの？それは、本作のクライマックスが近づくにつれて、“悪の所在”がヴェーダではなく、まさにインドの警察組織そのものにあったことが明らかにされていくからだ。なるほど、ヴェーダの自首や自分の弁護をヴィクラムの妻のプリヤーに依頼したのは、ヴィクラムにそんな巨悪の存在をわからしめるためだったのか！そんな、あっと驚く事実が、本作ではそれなりの説得力を持って明かされているので、それに注目！

■口■『昭和残侠伝』では高倉健と鶴田浩二が共闘！本作は？■口■

高倉健の『昭和残侠伝』シリーズは全9作作られた。その共演者は鶴田浩二、池部良、松方弘樹、長門裕之、藤純子等々だ。同作、ラストのクライマックスは、堪忍袋の緒が切れた高倉健がドス（自刃）を引っさげて殴り込みと決まっている。そのため、同シリーズ各作では、ストーリーはもとより、時代背景や舞台そして共演者をさまざまに変えながら、いかにクライマックスまで持っていくかが大きなポイントになっていた。なお、クライマックスの殴り込みを成功させ、高倉健が生き残るのは絶対的な約束事だが、その殴り込みのパターンは、高倉健単独、もしくは相棒と2人に分かれ、さらに2人の場合、相棒は死亡するのか、それとも生き残るのかで分かれることがシリーズ全作を鑑賞すればよくわかる。

しかし、本作ラストのクライマックスでは、はじめて手を組んだヴィクラムとヴェーダが、たった2人で悪に染まった大勢の警察官やその幹部たちとド派手な銃撃戦を展開するが、そこで生き残るのはヴィクラムだけ？それとも、ヴィクラムとヴェーダの2人？そんな興味を持って、本作ラストのクライマックスは、あなた自身の目でしっかりと。

ちなみに、ほぼ満席の本作のお客さんは90%が女性。そのためか、157分の長尺を終えた後、会場内ではインド映画特有の（？）拍手が・・・。

2024（令和6）年1月30日記